

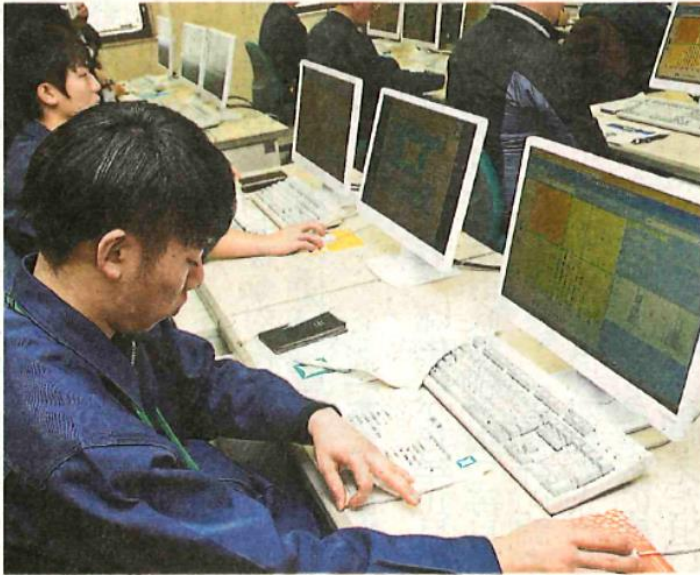
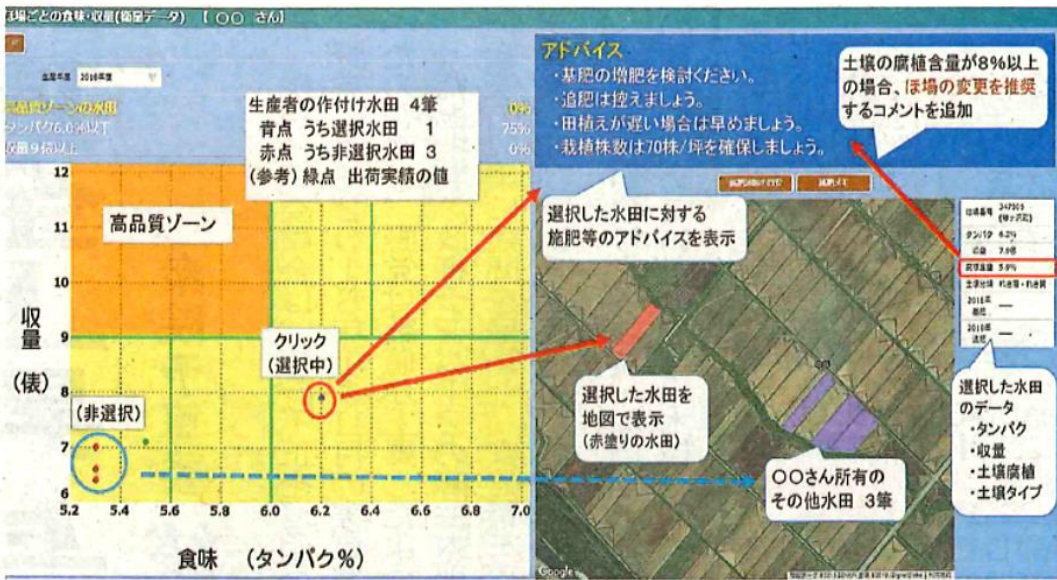
# 霹靂栽培 ICTで指導

## 食味・収量水田ごとに

県産技術センターは、情報通信技術（ICT）を活用して県産米「青天の霹靂」の栽培方法を指導するシステム「青天ナビ」を開発した。出荷実績や人工衛星が撮影した水田の画像をICTで一元管理し、個々の水田の食味や収量を正確に分析できるのが特徴。霹靂は天候不順で2018年産の収量が落ち込んでおり、同システムの運用でブランド米としての食味と収量の両立を図る狙いだ。

（永野悠太）

### 県産技術センターシステム開発



【写真上】青天ナビのイメージ図。水田ごとの収量と食味の傾向がグラフで表され、アドバイスも得られる（県提供）【同下】「青天ナビ」の操作方法を学ぶ研修会の参加者

人工衛星の画像を解析して水田を1枚ずつ色分けし、収穫時期などを判定する技術は既に県内で実用化されているが、タンパク質含有率や収量など複数の情報を一元管理するシステムの開発は初めて。県や農協の指導員が19年産の生産から、タブレット端末やスマートフォンで必要なデータを画面に表示し、生産者の栽培指導に使う。

具体的には、出荷実績を基に、食味を左右するコメ粒のタンパク質含有率と収量の生産者別の数値を点の分布で比較。数値が低い方

がおいしいとされるタンパク質含有率が高い上、収量が少ないなど指導が必要な生産者を簡単に絞り込める。

画面上で任意の生産者の点を選択することで、生産者が栽培する水田1枚ごとに、人工衛星の画像から解析した食味や収量の詳細なデータを見ることも可能だ。

コメは一般的に収量を増やそうと肥料を与えすぎると、タンパク質含有率が高くなり、食味が落ちるとされる。▽タンパク質含有率が高い水田は肥料を減らす▽収量が少なすぎる水田は肥料を増やすなど、指導員が画面上のデータを参考に効率的な指導を行うことができる。霹靂の栽培に適さない水田を把握するのにも

役立つという。

5日、青森市の県総合社会教育センターで同システムの操作方法に関する研修会が開かれ、参加者は「記憶を頼りに指導することもあったので、明確な複数のデータをすぐに使えるのは便利」と話していた。

霹靂は食味を重視するためには収量の目標が他の品種より低く設定されており、

目標よりさらに収量が低下すると生産者の収入面での影響が大きい。県産技術センター農林総合研究所（黒石市）の境谷栄二・生産環境部長は「青天ナビのデータを活用し、収量と食味のバランスを取ってほしい」と語る。

生産者が直接利用できるようなシステムを改良していくという。